

被災自治体で活躍する「派遣職員の声」 — 岩手県 —

＜岩手県沿岸広域振興局土木部復興まちづくり課 齋藤 修（土木職）＞

■ 自己紹介

昭和61年度に入都し、建設局で主に道路の設計業務を担当していました。

昨年度から岩手県沿岸広域振興局土木部に派遣され2年目となります。

■ 派遣を希望した理由・きっかけ

東日本大震災直後の平成23年6月から翌年9月までの1年4か月、岩手県沿岸広域振興局土木部に派遣され、岩手県職員や地元の多くの方々との出会い、お世話になり、この経験が大きな財産となっています。

派遣も終盤を向かえ、少しでも恩返しのお機会となればと2度目の派遣を希望しました。

■ 派遣先での業務内容・やりがい

大震災の津波で流失した釜石市鶴住居町にある根浜海岸の砂浜再生事業を昨年度に引き続き担当しています。流失した砂浜に新たな砂を入れ震災前の浜幅に回復させる事業です。

今年度はⅡ期工事を行い、工事当初は波浪で砂が思うように定着せず、海と向き合う日々が続きましたが、8月下旬に完了することができました。

今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、昨年度の夏、Ⅰ期工事の砂浜が使われ9年ぶりの海開きが開催され、歓声を上げて海水浴を楽しむ子供たちの姿を見ることができました。

今後は、工事完了後の地形変化を調査するなどの業務委託を監督し、今年度開催予定の技術検討委員会及び懇談会に向けて業務を進めていきます。

このほか、片岸海岸導流堤工事を担当し、現場立会など監督業務を行い、11月上旬に完了することができました。



根浜海岸の砂浜再生工事状況



片岸海岸導流堤現場立会状況

■ 被災地派遣で学んだこと・感じたこと

昨年10月の台風第19号で東京都も道路、河川等に被災を受けました。

東日本大震災以降、熊本地震や西日本豪雨など毎年のように日本各地で自然災害が発生しています。

自然災害はいつ起きるか分かりません。

「災害手帳」という災害復旧事業に関する国庫負担申請の事務手続きや必要となる技術的な留意点の基本について解説しているハンドブックがあります。

巻頭には「災害復旧事業は公共土木施設の災害の速やかな復旧を図り、再度災害や被災の拡大の防止のために迅速な対応が求められる。被災の様態は現場毎に異なるため、被災原因と状況の把握、復旧工法の選択、設計・施工に際しての留意点の抽出など、技術者の経験と技術力が要求される。」と書かれています。

技術系職員として災害復旧業務の重要性を実感しています。

■被災地での日常生活について

朝、公舎近くの甲子川沿いを30分ウォーキングしてから、徒歩で8時に出勤。

8時30分から17時15分まで勤務。

定時退庁に努め、お気に入りの岩手県内のニュースや情報番組を観て、眠くなったら就寝。

時々、釜石の知り合いの店で食事をしたり、お酒を呑んだり、1度目の派遣からお世話になっている県職員や地元の方々と交流を深めています。

県内めぐりもしたいところですが、コロナ禍が続いており、今のところ実行できていません。

■被災地派遣を振り返って

1度目の派遣で初めて訪れた6月の釜石は、震災の爪痕が残り、駅前交差点の信号機も復旧しておらず、他県の警察官が手旗信号で対応しており、災害活動の自衛隊の車も走っていました。

中心市街地にも、倒壊した建物や道端には瓦礫が残っており、街灯も無くなり夜になると周囲が真っ暗で海中電灯を片手に歩くほどでした。

また、大槌町の想像を絶する被災状況を目の当たりにし、果たして自分たちに何ができるのだろうと戸惑いと不安を抱いたことを覚えています。

しかし、ある方との出会いが不安を無くしてくれました。

その方は、自身が自宅と店舗の被災を受け、臨時職員として東京班の運転手をしてくれた方です。

土地勘の無い私たちを乗せ、連日朝から晩まで、複数の被災現場に連れていってもらい、手が足りないため、運転業務以外の測量作業も率先して手伝ってくれました。

私たちも仮設住宅で生活した時期もあり、冬場の水道の凍結対応で連日奮闘してもらうなど、日常生活の面でも大変お世話になりました。

その方の私たち派遣職員に対する献身的で前向きな姿を見て迷いは無くなりました。

すべては岩手のために。

東日本大震災から間もなく10年となります。関連工事の今年度未完了に向けてラストスパート。

被災地支援派遣に送り出してくれた建設局の皆様、これまでに岩手県の派遣業務に携わった皆様に感謝しています。